

## 成果と課題、成果の普及

三小田 博 昭

### 1 研究開発の実践

SGH研究開発4年次である平成30年度は、以下の取組を重点的に行った。

- ①興味関心の育成「課題探究Ⅰ」と仮説検証型課題研究「課題探究Ⅱ」
- ②国際的素養を身につける「協同的探究学習」の成果普及
- ③グローバル拠点の効果的な活用法「国内グローバル拠点」の拡大
- ④グローバル拠点の効果的な活用法「海外グローバル拠点」の拡大
- ⑤英語による思考力・表現力を育成するALEの成果報告
- ⑥検証評価に関する実践

上記①⑥の成果を普及するために、SGH成果発表会を2019年2月8日（金）に実施した。成果発表会には、全国から178名の教育関係者が参加し、公開授業、授業検討会、講演会が行われた。

（公開授業：通常教科）

協同的探究学習の実践と評価中学の「国語・英語・社会・体育」の授業を公開した。

（公開授業：課題探究Ⅱ）

高校1年生のPBL基礎、および高校2年生のPBL課題研究を公開した。

2019年2月8日（金）  
SGH（スーパーグローバルハイスクール）4年次 研究成果発表会  
国際的素養を身につける協同的探究学習・新学習指導要領「探究」に向けてー

名古屋大学教育学部附属中・高等学校

主催 名古屋大学教育学部附属中・高等学校  
後援 愛知県教育委員会  
名古屋教育委員会

\*\*\* ご案内 \*\*\*

スーパーグローバルハイスクール4年次の研究成果発表会を、2019年2月8日（金）に本校において開催いたしますので、ここに謹んでご案内申し上げます。

本校は、物事をその根柢のところから捉える視点を大切にし、地球的課題に取り組む国際的視野に立って、取り組む課題を発見し、その解決の道をあきらめなく探究する意志と力を育てたいと考え、SGHの実践と研究に取り組んでまいりました。今回はその成果の一部を発表させていただきます。

みなさまのご来場を心よりお待ちしております。

名古屋大学教育学部附属中・高等学校  
校長 中嶋哲彦

SGH（スーパーグローバルハイスクール）4年次 研究成果発表会

1 主題 国際的素養を身につける協同的探究学習・新学習指導要領「探究」に向けてー

2 期日 2019年2月8日（金）

3 日程

9:00	9:30	10:00	11:30	13:00	14:30	14:40	15:40
受付	全体会		公開授業	昼食	講演会		教科別授業検討会

\*生徒によるポスターセッション（SGH研究成果の発表）を12:30～13:00に行います。

4 会場：本校  
全体会・講演会・生徒によるポスターセッション：交流ホール  
公開授業・授業検討会：各教室

5 内容

(1) 全体会 9:30 ～ 9:50  
開会挨拶 名古屋大学 教育学部長 横田 健男  
高岡報告（研究の概要） 副校長 三小田 博昭

(2) 公開授業  
\*1時間目 (10:00～10:50) 高校1, 2年は(10:00～11:50)

学年	科目・単元・課題	ねらい	授業内容	授業者
中学1年	① 国語 「魅力を伝えよう」	魅力を伝えるために、主張と理由のつながりを持たせた文章が書けるようになる。	合唱祭で自分たちが歌う曲の魅力を伝えた文章を書き、クラス内で検討する中で良い書き方を学ぶ。	瀬古洋祐
中学2年	② 社会 「『開国』を多角的に考えよう」	日本の社会が大きく変化した背景を様々な側面から理解し、一つの出来事に対して、多様な見方ができるようにする。	幕末の情勢を複層的に上で、様々な角度から「開国」について考察する。	尾方英美
中学3年	③ 英語 「英語で自分の考えを伝えよう」	学んだ英語ではなく、その場に応じた、相手に伝えるための英語を話す・聞く力をつける。	留学生をファシリテーターとして、小グループで、ゲームを通して、考えあがた課題解決に挑む。	三小田博昭
高校1年	④ 課題探究Ⅱ (総合人間科) (11:50まで)	PBL(ProblemBasedLearning)グループごとに設定した課題について、他のグループの成果の聞くことによって、批判的思考と多様な視点を身につける。	前で研究成果と課題を発表し、グループ全体に共通するテーマについて意見交換をする。また、今までの自分の取り組みの振り返りを行う。	亀井千恵子 今村飯司 松本拓也 加藤啓子 斎藤雄 渡辺武志
高校2年	⑤ 課題探究Ⅱ (総合人間科) (11:50まで)	自らの個別探究を、グループメンバーとの学び合いの中で、より深める。	前半は個別探究の成果を発表し、グループ別に発表する。後半は、個別探究の過程を踏まえ、研究計画や方法をよりよくするための振り返りを行う。	横渡郁也 大林真美 松本真一 市川哲也 齋藤雄加子 曾我雄司

\*2時間目 (11:00～11:50)

学年	科目・単元・課題	ねらい	授業内容	授業者
中学1年	⑥ 体育 「アグアテッドスポーツを創ろう」	スポーツを協同参加に含めて、つくり変えていく過程で、他者と関わりながら、様々な発想の糸口に気づかせる。	アグアテッドスポーツについて学び、新たなアイデアを出し合い、仲間と実践を通して改良していく。	佐藤純太
中学2年	⑦ 国語 「意見文を書く」	他者の反論に答えることで、自分の意見の説得力を高める。	環境問題に関する意見文を書くための材料を集める段階である。グループ内で自分の意見を発表し、反論してもらい、その考えを考へる。	杉本雅子
中学3年	⑧ 社会 「名古屋の観光客を増やすには」	主催者教育の一環として、地方自治の単元で取組を身近なものとして捉えさせる。	名古屋の観光客を増やす方策についてグループ発表を行い、発表内容についてさらに検討を加える。	隅田久文

(3) ポスターセッション (12:30~13:00)  
SGH海外研修に参加した生徒によるポスター発表

(4) 講演会 (13:00~14:20)

講師：東京大学大学院 教育学研究科 秋田喜代美先生  
「グローバルコンピテンスの育成と協働的探究的な学びのこれから」

＜講演概要＞  
急速に変化するグローバル化する社会に直面する中で、私たちに求められる資質とはどのようなものだろうか。OECD Education 2030 プロジェクトではこれからの求められる資質としてのグローバルコンピテンスのありよう、それを実現するためのカリキュラム、そして実践のつながりを現在問おうとしている。それは学習指導要領の中においても表れている。なぜそのようなことがとめられるのか、ではそれはどのようなものであるのかを、筆者自身が関与してきた国際協働をふまえた協働的探究的な学びの実践事例等をもとにお話させていただく予定である。地球市民として私たちに求められることは何か。特に中等教育の段階ではなぜ何が必要なのか。確定した知識とスキルを確かなものとして身に付けるだけではなく「不確かさ」を問い探究をする学び、そして探究的に学ぶ学び方を学ぶこと、またそれを通して価値や態度を育むことが求められている。これは、各クラスや各教科単位だけではなく、学校として生徒に求められることであるとともに、各教師にも、また学校と協働する保護者や大学関係者にも求められることである。質の高い協働的探究的学びには何が必要なのかを、皆様と共に考えてみたい。

＜プロフィール＞  
東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学、博士（教育学）。東京大学教育学部助手、立教大学文学部専任講師、助教授を経て、1999年より東京大学大学院教育学研究科に勤務。現在東京大学大学院教育学研究科教授、同附属発達保育実践政策センター センター長。専門は、教育心理学、保育学、授業研究文部科学省中央教育審議会教員養成部会委員、教育課程学習評価WG委員等。World Association of Lesson Studies. Vice President. OECD日本イノベーション教育ネットワーク研究総括。約30年間校内研修に関わり、子どもたちの学びと育ち、学校創り支援に従事させてもらっている。

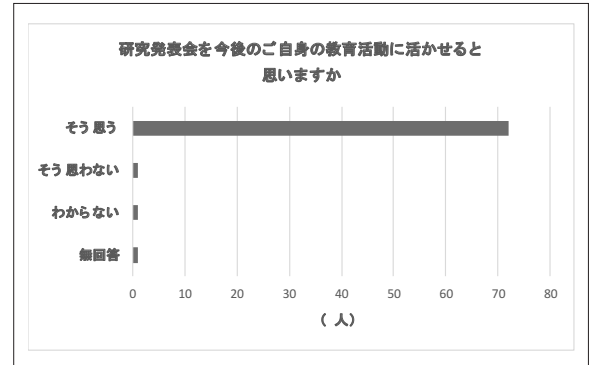
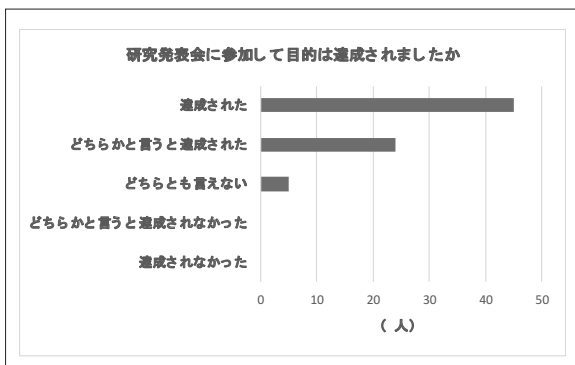
＜著書＞  
秋田喜代美・福井大学教育学部附属義務教育学校研究会（編）（2018）『福井県 プロジェクト型学習：未来を創る子どもたち』東洋館出版  
経済協力開発機構（OECD）編著ベネッセ教育総合研究所（企画制作）無藤隆・秋田喜代美（監訳）『探究的学び』・新村隆志・高岡純子・具田美恵子・持田聖子（訳）（2018）『社会情動的スキル：学びに向かう力』明石書店  
鹿毛雅治・藤本和久（編）（2017）『授業研究を創る』（秋田喜代美「日本の授業研究の独自性」とこれら」分担執筆）教育出版  
秋田喜代美・和歌山大学附属中学校（著）（2017）『学びをデザインする子ども達：子どもが主体的に学び続ける授業』東洋館出版  
佐藤学・秋田喜代美・志水宏吉・小玉重夫・北村友人（編）秋田喜代美（責任編集）（2017）『教育変革への展望 第5巻 学びとカリキュラム』岩波書店  
他、多数。

全国から178名が参加した。内訳は、教員（124名）、大学生（46名）と教育委員会他（8名）であった。北海道、東北、関東、関西からの参加者も多く見られ、本校SGHへの関心の高さが窺えた。

（参加の動機）

- ・自分の学校、授業に探究学習を取り入れるため。（高校教員）
- ・最先端の教育研究とその実践を学ぶため。（大学生・院生・名古屋大学以外）
- ・即興生の英語のやりとりをねらった英語の授業に興味を持ったから。（中学校教員）
- ・探究の授業の参考にさせていただきかった。またSGH認定校の取組みがどのようなものかを見せていただきかった。（高校教員）
- ・本校もSGH校として課題研究をしているため。（高校教員）
- ・本校が国立教育研究指定校として「課題研究」の授業検討を行っているため。（高校教員）

（達成された理由）



- ・参考にした実践したいと思うことをたくさん学ぶことができた。
- ・日本語では学級活動でやったことがあったのですが、英語の授業でこんなこともできるのかと驚きでした。
- ・評価について深く学ぶことができた。強いて言えば実践をもっときく場面があればよかった。
- ・活動内容を見せていただき勉強になりました。

（そう思うと答えた理由）

- ・具体的に考えさせられたから。
- ・生徒がためらうことなく、積極的に学びあいへ向かう姿を見ることができたから。
- ・英語の授業においてかなりたくさんのヒントをもらうことができたから。
- ・学習指導に関わる授業の参考になったから
- ・本質的な部分に触れることができたため。

（授業検討会に参加した参加者の感想）

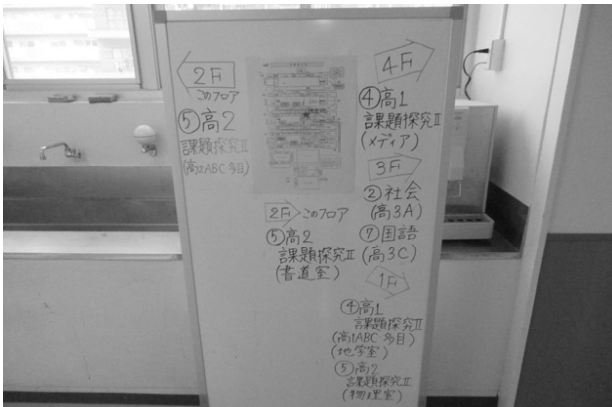
- ・今回の授業でどのような点がよかったかについて、分析することができてより具体的になった。
- ・授業を参観しながら疑問に思っていた教材選定時の考えや、授業におけるねらいを学ぶことができてよかったです。
- ・自分が授業をみていて気づかなかった授業の視点を知ることができてよかった。
- ・授業をしてくれた先生がどのような意図で授業をしているのかを知ることができた。



（案内板を持つ生徒）



(地下鉄の案内版に掲示)



(校内の掲示板)

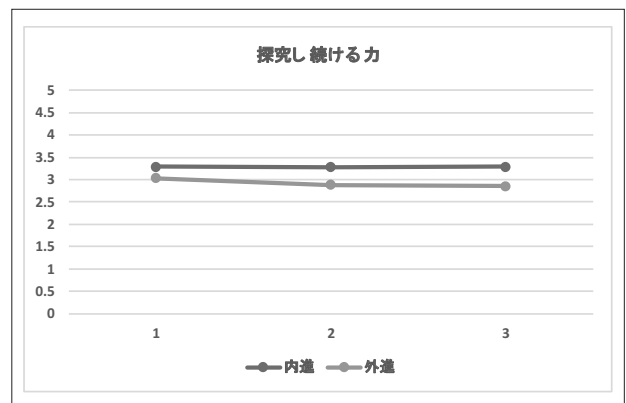
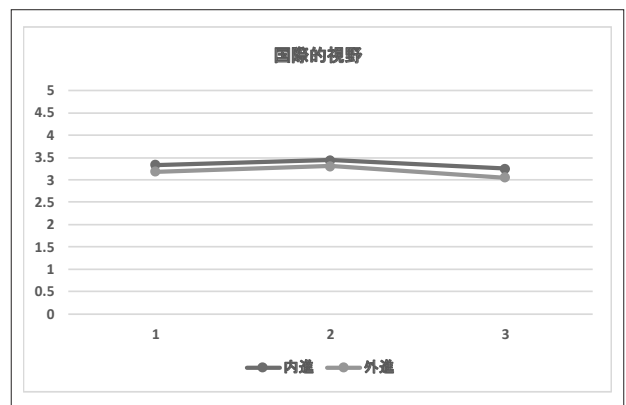
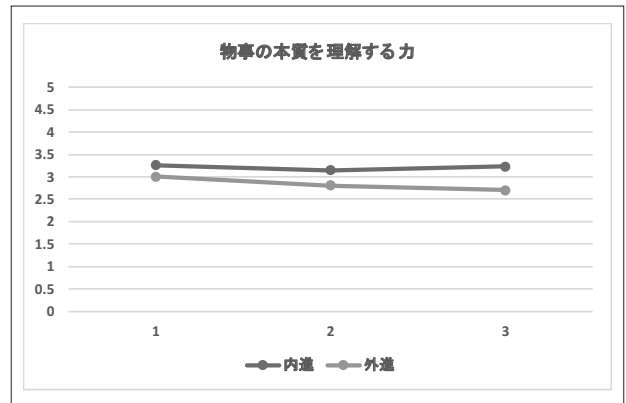
## 2 30年度SGHプログラム評価に関わる事項

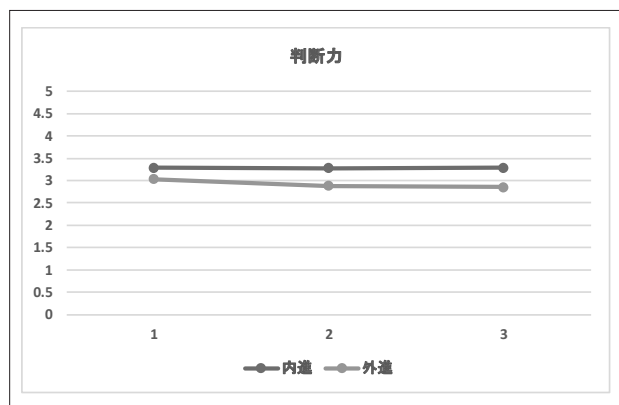
- ①生徒の意識をはかるアンケート：データの収集 中学1年生と高校1年生（4月）
- ②生徒の意識をはかるアンケート：データの収集 中学1年生、高校3年生（12月）
- ③生徒の思考力をはかる記述型課題の実施：高校1年生（4月）
- ④生徒の思考力をはかる記述型課題の実施：高校2年生（3月）
- ⑤英語力調査：中学2年生～高校2年生（GTEC for Students Benesse）
- ⑥生徒学校調査の実施（12月）
- ⑦保護者アンケートの実施（12月）

### （1）生徒の意識をはかるアンケート結果

本校は併設型中高一貫校のため、附属中学からの進学者80名に加え、高校から新たに40名が新しく入学する。附属中学生もSGHでは研究開発単位Ⅰ（国際的視野を持って探究する6年必修課題研究「総合人間科」）や研究開発単位Ⅱ（国際的素養を身につける協同的探究学習）を経験している。また、中学生全校生徒240名のう

ち50名程度がGlobal Committee Juniorに所属し、校内で行う国際交流（主たる活動は留学生との交流）にも参加している。一方で、高校から新たに入学する生徒は、附属中学生が行っているような活動をほとんど経験したことがない生徒が多い。本校では、SGHの成果をはかるため、中学1年生、高校3年生まで毎年12月に「生徒の意識をはかるアンケート」を実施している。下のグラフは今年H30年度の高校3年生の経年変化（SGHでつける生徒の4つの力：「本質を理解する力」「国際的視野」「探究し続ける力」「判断力」）を追ったものである。縦軸は得点（5:とてもよくあてはまる 4:ある程度あてはまる 3:ややあてはまる 2:どちらともいえない 1:あてはまらない）、横軸は学年（1年次、2年次、3年次）を示している。内進とは、附属中学から高校に進学した生徒、外進とは附属中学以外から附属高校に進学した生徒を示す。





上記のどの項目をとっても、内進生の意識の方が外進生よりも高い意識を持っていることがわかる。中でも「本質を理解する力」「探究し続ける力」「判断力」の3つにおいては、3年間のうちに内進生と外進生の意識の差が大きくなっていることがわかる。内進生は3年間で意識の向上がみられるが、逆に外進生は意識が低下している。これは、中学からSGH研究開発に触れている内進生にとっては、課題研究を行うことや協同的な学びを行うことが、当たり前のことであると感じているのである一方、外進生は入学時に、高い意識をもって附属高校に入学するのであるが、3年間意識が継続していないからだと分析した。中学時代から「答えのない課題に取り組むこと」や生徒たちが「自ら学ぶこと」ができる教育を行うことが必要であると言える。高校から大学で進学する際の受験勉強と同様に、中学から高校に進学するための受験勉強で、本来の意味での「学びの連続生」に支障をきたすのではないかと考える。一方で、「国際的視野」に関しては、中学の時の経験の有無というよりはむしろ国際交流活動や海外研修などのような、生徒の「外向き志向」を取り入れた活動をすることで短期間のうちに効果がでることがわかった。しかしこの「国際的視野」に関しても、大学受験がある高校3年生にとっては意識が大学受験にいつてしまうこともアンケートから明確になった。現在改革が進んで「高大接続システム改革」の重要性が改めて認識される結果となった。

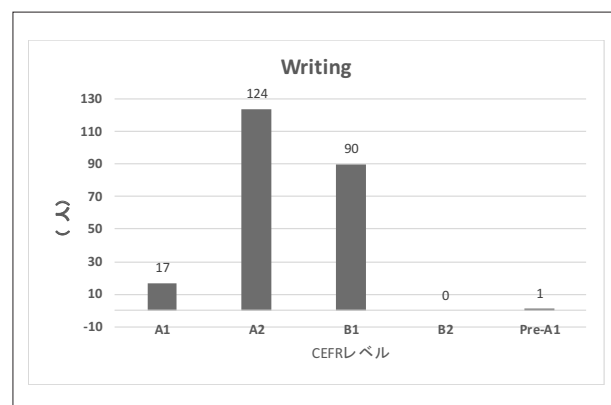
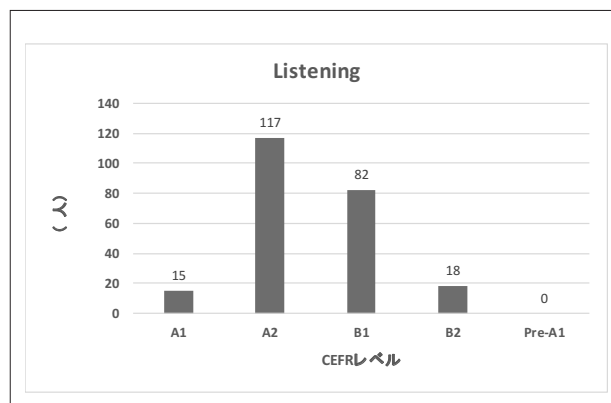
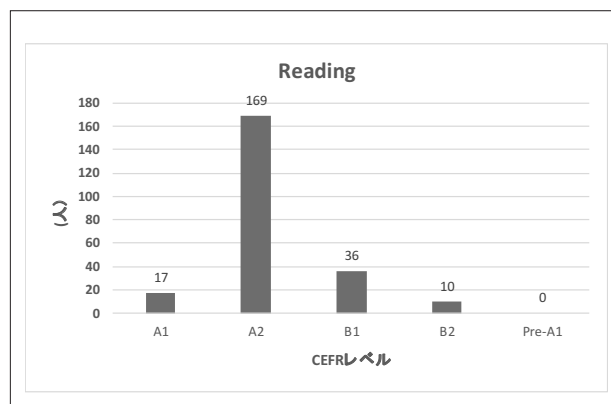
### 3 英語力調査

#### (1) GTEC for students

本校では、平成27年度から生徒の英語力を測るためにGTEC for students (Benesse) を実施している。対象学年と試験レベルは以下の通りである。実施は12月上旬である。以下結果である。

CORE	中学2年生 (80名)	
BASIC	中学3年生 (80名)	
ADVANCE	高校1年生 (120名)	高校2年生 (120名)

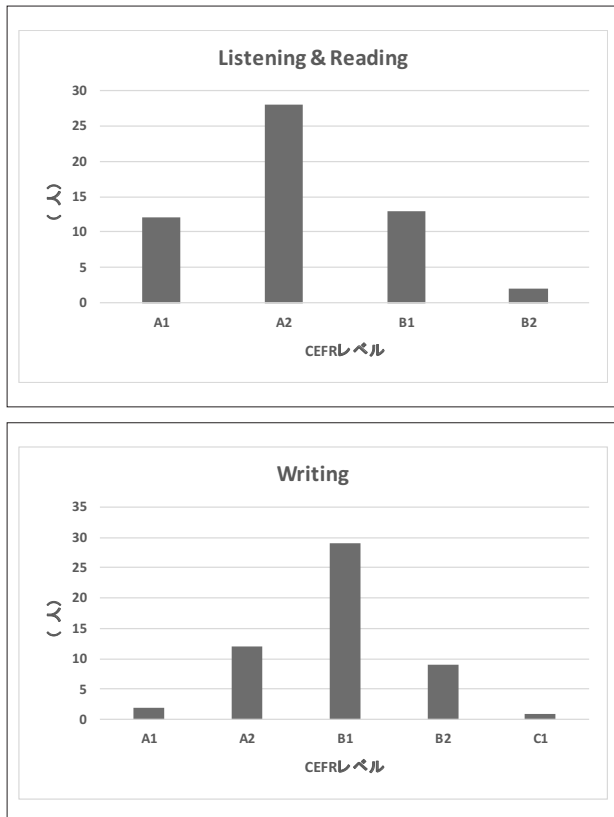
GTEC for studentsは、現在3技能 (Reading, Listening, Writing) を実施している。今年度からそれぞれの技能別にCEFRレベルが表示されるようになった。Pre-A1レベルの生徒がWritingででていることは生徒の力がついてきているからだと考える。



#### (2) Cambridge Benchmarking Pretesting

CBT (Computer Based Testのトライアルとして希望者55名が Cambridge Benchmarking Pretesting を受けた。Cambridge Benchmarking PretestingはListening & ReadingとWritingの2部門から構成されている。受験した生徒の結果を以下に記す。参加した生徒は55名 (中3: 17名 高1: 27名 高2: 9名 高3: 2名) である。





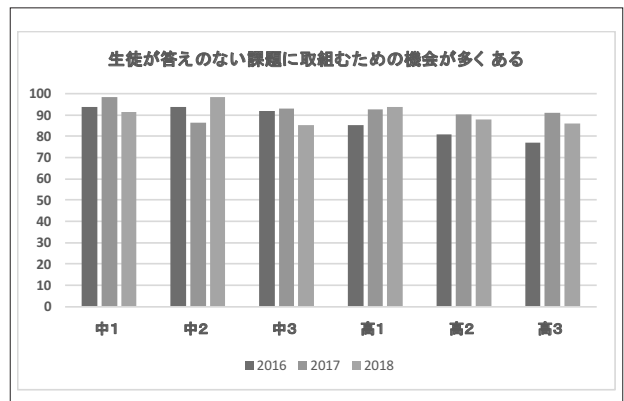
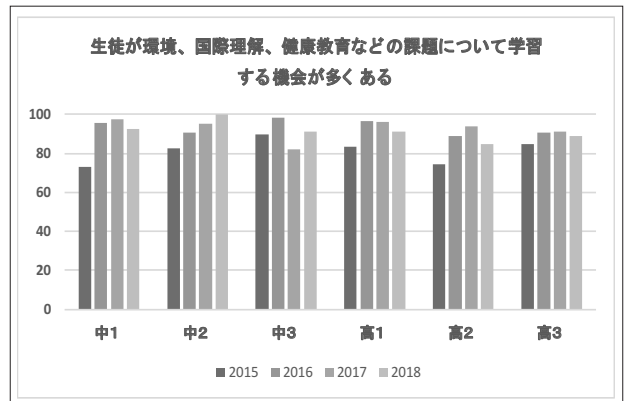
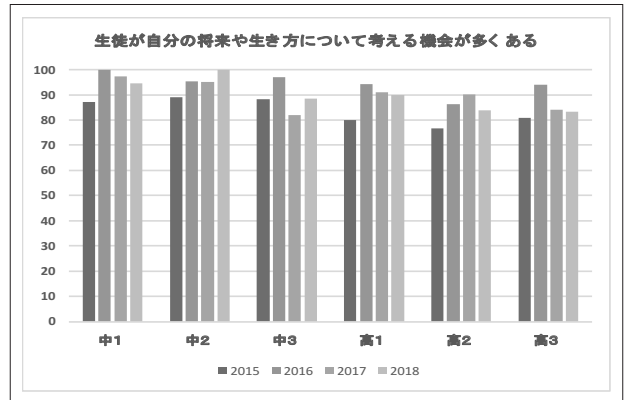
### (3) 名古屋大学国際開発研究科SKY（高1.高2全員）

Skills and Knowledge for Youthsプロジェクトに中3、高1、高2が参加し、「テスト得点と英語に関する質問項目・性格特性の関係」を調査した。結果「テスト得点が高い生徒は、英語や海外への関心や英語の必要性が高いと答える傾向、また、反対に、英語や海外への関心や英語の必要性が高いと答える生徒は、テスト得点が高い傾向にあった。」「中3では、英語の必要性が高いと思っている生徒は、外向性、協調性や開放性が高い傾向にある」ということが分かった。

### (4) 保護者評価

毎年12月に保護者に対して匿名で「学校生活環境調査」というアンケートを実施している。アンケートは、匿名で実施され、保護者が記入後、封筒に封をし、各学級で回収される。回答方法は5件法で（5.よくあてはまる4.あてはまる3.あまりあてはまらない2.まったくあてはまらない1.わからない）マークされ、自由記述欄もある。アンケート項目の中でSGHに関係のある質問項目について調査結果を記載する。下記のグラフは2016年度（SGH1年次）から2018年度（SGH4年次）の経年変化である。下の表は、「あてはまる」「よくあてはまる」と答えた保護者の割合である。

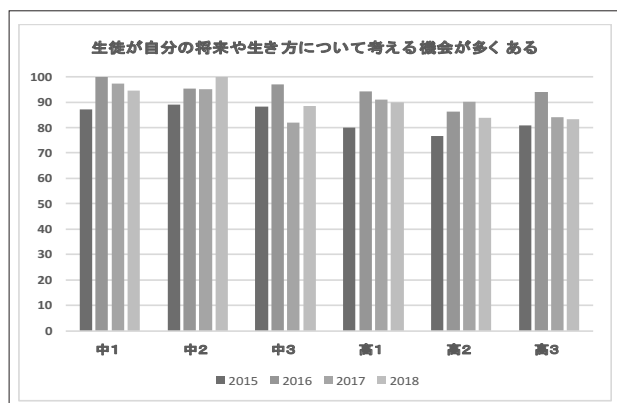
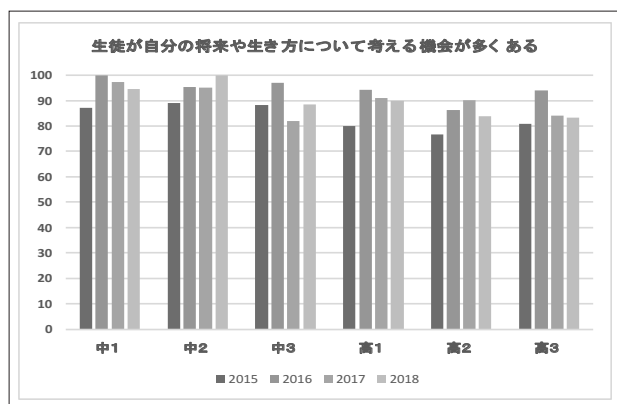
（課題研究に関して）



中学1年生から高校3年生まで一貫してSGH課題探究を実施している。生徒の課題研究成果発表を学年末に行い、多くの保護者が参加するため、学校教育での概要を保護者は十分理解している。ほとんどの項目においてSGHを開始した2015年では相対的に低かった項目もSGHを継続的に実践していくにつれ、年度ごとの相違はあるものの、保護者のSGH教育に対する理解が深まっていることがわかる。逆に言えば、SGHの効果を保護者が認めていないならば、SGHに対する批判的な結果がでるのだが、保護者の立場から本校が行っているSGH研究開発に対して効果を実感していることがわかる。「生徒が答えのない課題に取り組むための機会が多くある」と感じている、受験期の高校3年生を持つ保護者にとっても、高い数値を維持していることも特徴である。「暗記・再生」型の受験学習だけでなく、「理解・思考」型学習を重視

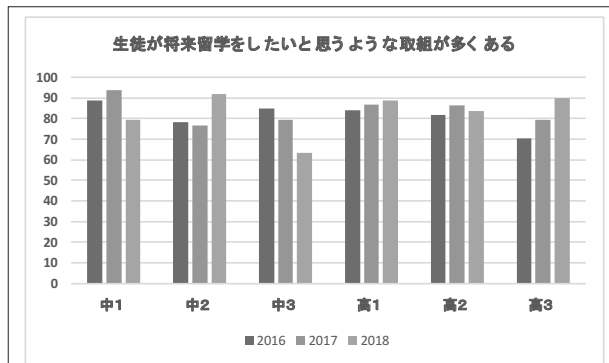
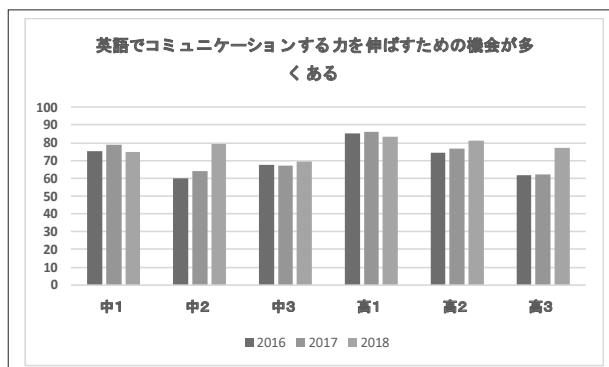
している本校の教育方針に対して保護者の理解を得られている表れである。また課題研究を通して、生徒がキャリア形成をしていることを肯定的に保護者も感じている。

(SGH企画に関して)



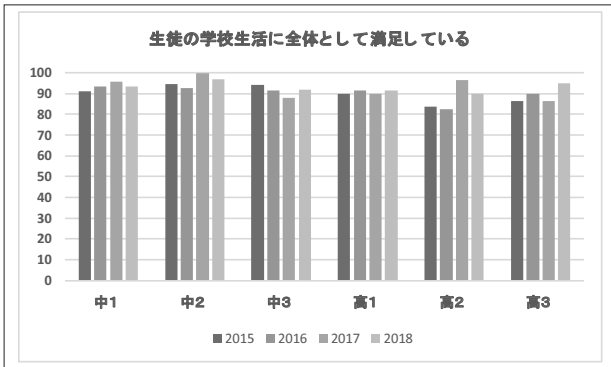
「日本文化に興味を持つための機会」が多いと感じている保護者が2016年度と比較して相対的に増えていることがわかる。海外からの留学生が年間を通して非常にたくさん本校を訪問（2016年度482名、2017年度293名）し、日本文化を紹介することや、海外からの留学生との交流をとおして、自国文化を意識する機会がふえていることが理由であると推測する。また、留学生に着付け、お茶・お花を紹介する際に、保護者ボランティアに依頼することが多くなったことや、留学生向けの着付け、お茶・お花体験を日本人中高生にも開放したことも理由だと考える。「海外の文化に興味を持つための機会」に関しては、中学1年から高校3年までの保護者の90%近くが「多くある」と回答をしている。高校3年生は、受験の関係から外国の文化に触れる機会が他学年比較して少ないのであるが、低学年の時に本校の特徴である「異文化交流」を経験しているため、高校3年生になっても、その意識が継続していると考えられる。中学生も同様に今後上級生になったときに多くの「異文化交流」が用意されていることを知っているために、得点が高いと考えられる。また、多くの短期・長期の留学生がいつも校内に居るため、校内に留学生がいることが当たり前のことと生徒が感じているだと推測する。

(外国語関係について)



「英語でコミュニケーションする機会が多い」と感じている保護者の伸びが高校1年と2年で多いのは、本校が行っているALE (Active Learning in English) や Global Discussionの主な対象者が高校1年と2年を対象としているからだと考える。また、それらの取組に対する知名度が、校内で年々向上していることも理由の1つである。加えて「SGH企画に関して」でも記したが、本校には実に多くの留学生が毎年来校する。その度ごとに本校生徒と交流する機会を持つが、その対象となる生徒は高校1年と2年の生徒が多い。理由は留学生とコミュニケーションをとることができる英語力がある程度持っていることである。中学生も交流する機会はあるが、高校生と比較してその機会は多くない。それがこのアンケート結果にでていると分析した。「生徒が将来留学したいと思うような取組が多くある」という項目が高校生で年々上昇していることは、本校SGH研究開発の成果である。実際高校在学中に長期にわたり海外に留学する生徒が増えている。それらの生徒のうち、留学留学（帰国後、元の学年に戻る）生徒のほか、休学留学（帰国後、1つ下の学年の所属する）の生徒も増えている。高校での多様な学び方が少しずつ浸透してきている。またSGH海外研修として海外に派遣する生徒数も増えてきている。海外との高校交流に加えて、海外の大学生活を垣間見る機会を研修中に組み込んでいるため、海外留学に対する垣根が低くなってきている。また保護者自身も子どもの海外留学を期待している部分もある。

(総体的な評価について)



保護者のみなさま

平成 30 年 4 月 13 日

名古屋大学教育学部附属中・高等学校  
校長 中嶋 哲彦

SGH ボランティア募集のお知らせ

平素より本校の教育にご支援いただき誠にありがとうございます。本校は H27 年度にスーパーグローバルハイスクール (SGH) の研究開発指定を文部科学省より受託いたしております。SGH に関わる多くの行事、イベントが年間を通して計画されています。これらの活動に保護者のみなさまのお力添えをいただければと思います。

ご協力していただける保護者のみなさまは、下記の登録用紙にご記入の上、キリトリ線より切り取り、担任教員にお渡ししてください。よろしくお願いいたします。

ご質問などは附属学校職員室までお願いします。登録をしていただいた方には直接学校からご連絡をさしあげることがあります。また、登録していただいたにもかかわらず、当該行事がない年度場合にはご連絡をさしあげない場合もありますがご了承ください。お手数をおかけいたしますが、昨年度ご登録していただいた保護者のみなさまも再度、ご登録していただけたら幸いです。

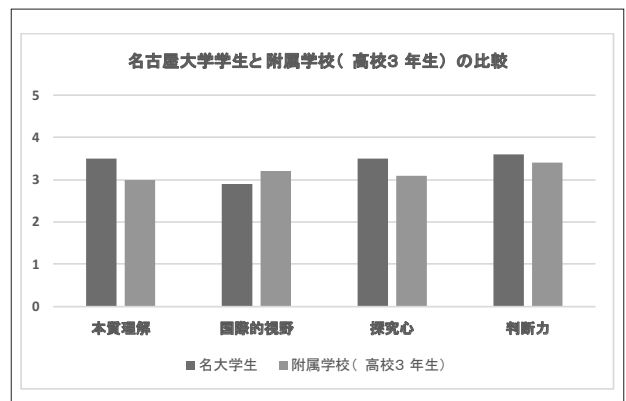
キリトリ

SGHをスタートした2015年度から、各学年においてグラフが毎年伸びていることがわかる。言い換えれば、保護者のSGH研究開発や学校に対する満足度が上昇しているとも言える。中学1年・高校3年まで90%以上の保護者が、子どもたちの学校生活に満足している。このことはSGHを開始したことによる大きな評価である。学校での様子が家庭によく伝わらないという意見を聞く学校は多いが、本校では生徒たちが学校での様子を家庭で保護者に伝えているがゆえに、保護者が学校のことを理解できているのではないかと考える。保護者の満足度が高いということは、結果として学校の教育方針や教育方法を支持・支援してくださる保護者の増加につながる。本校では、SGHを開始してから、「SGH保護者ボランティア制度」を取り入れた。右のスライドは、H30年度の保護者ボランティア募集」のプリントである。その結果として、今年度も長期・短期のホストファミリーとして留学生を受け入れてくださった保護者も少なくない。また、1年を通じてたくさん来校する留学生の通訳も担ってくれる。今まさに「学校における働き方改革」が問われている中、SGH保護者ボランティア制度は、その先進的な事例としてあげることができる。また、この取組は保護者の学校理解にもつながるため「教員の負担軽減」と「保護者の学校理解」という観点で見れば相乗効果が期待できる。加えてSGH全体への理解を充分されているため、日本全国に対して力強いSGH応援団となっている。またそれが大きな広報活動となることは確かである。

## (5) 名古屋大学学生と附属学校生徒に比較検討

今年度、名古屋大学で教職科目を受講している大学生に、附属学校で行っているSGHで育成する力をはかるための「意識調査」を実施し、附属学校の高校3年の生徒と比較検討をした。調査項目は、「物事の本質をとらえる力」「探究心」「国際的視野」「判断力」についてである。大学生と比較検討をした理由は、附属学校で行っている「意識調査」の一般化の可能性と、将来教職に就くことを希望している学生の「物事の本質をとらえる力」「探究心」「国際的視野」「判断力」を調査することである。教科教育法を受講している大学生の多くは2回生や3回生で高校3年生と年齢的に近いと、調査対象に適していると考えている。

大学生は教科教育法（理学科教育法、数学科教育法、英語科教育法、社会科教育法、国語科教育法、教科外教育法）を受講している146名がアンケートに回答をした。所属学部は理学部、農学部、文学部、教育学部など多岐にわたる。調査は5件法で実施した。縦軸は得点（5:とてもよくあてはまる4:ある程度あてはまる3:ややあてはまる2:どちらともいえない1:あてはまらない）を表わしている。



### 大学生の属性 (146名)

#### SGH 校出身者

#### SGH 校出身でSGH プログラム経験者

#### SSH 校出身者

#### SSH 高出身でSSH プログラム経験者

#### 非SGH / 非SSH 校出身者

#### 不明

上記の結果からもわかるが、多くの項目で名古屋大学学生の意識が附属高校3年生よりも高いことがわかる。大学2年生になり本格的に研究活動を開始したことに起因すると分析した。しかし、国際的視野に関しては、附属学校3年のほうが高い。調査をした大学生が教科教育法を受講している点にも着目したい。将来教職に就くことを希望しているかもしくは教職に興味・関心のある学生が教科教育法を受講しているため、教員として授業を

行うためには「物事の本質を理解する力」「探究し続ける力」「物事の判断をする力」が必然的に必要となる。その意味からも高校3年生よりも意識が高いことは理解できる。しかし、「国際的視野」に関する項目では、高校3年生の方が高いことに着目したい。この点に関して、まず大学生の属性に着目したい。SGH校／SSH校出身者の数が少ないこともこの結果に影響をしていると考える。特にSGH校は全国に123校しかないことと、SGH校でSGHプログラムを3年間経験している大学生が、まだ多くないことが原因である。そのことを考慮したとしても、今後中等教育が国際化していかなければならないことを考えると、将来教職を目指す大学生の「国際的視野」が低いことが課題であることがこの調査からわかった。また、他の3項目は、得点が3を超えているにも関わらず「国際的視野」にもが3を下回っていることも課題であると考え。本校は、海外研修や、留学生との交流、海外留学を積極的に実施しているため、「国際的視野」の項目が高いことは納得がいく。このことは海外研修を取り入れている他のSGH校にもあてはまると想像できる。中等教育の時代に「国際的視野」広げていく教育が必要なことは、この結果からわかる。特に将来教職を目指す大学生はなおさらである。なぜならば、「国際的視野」を持った教員は、生徒の「国際的視野」を広げる教育ができるからである。次年度以降も教職を目指す大学に対してのアンケート調査を継続して実施していき分析を精緻化していきたい。

#### (6) 名古屋大学学生の属性による「意識調査の比較」

名古屋大学で教職科目（理科教育法、数学科教育法、英語科教育法、社会科教育法、国語科教育法、教科外教育法）を受講している名古屋大学の大学生の属性（高校のSGH指定の有無と学生本人のSGHプログラム経験有無）による「意識調査の比較」を行った。SGHで本校が生徒につけさせたい4つの力を測る質問項目（56項目）での比較を行った。以下の今日は、56項目のうち得点がそれぞれ比較して高かった項目の数である。

高校のSGH指定		本人のSGHプログラム経験	
SGH指定校出身 (7名)	指定なし (82名)	プログラム経験 あり (6名)	経験なし (92名)
36項目	21項目	32項目	26項目

「意識調査の比較」の結果、高校時代にSGHに触れている学生の方が、そうでない学生よりも多くの項目で「意識が高い」ことが分かった。しかし、SGHに触れている学生数が多くないため、今後は継続して調査を行い、分析のサンプル数を増やして行く必要がある。

(文責 三小田博昭)